

令和3年度 北海道ブロック教育講演会

10月9日(土)、会員の見識を高め、PTA活動への意識高揚・実践につながる気付きの機会となることを目的とし、新型コロナウイルス感染リスクを回避するため「オンライン配信」として開催されました。

講師 宮本 延春(みやもと まさはる) 氏(エッセイスト・作家)
演題 「オール1の落ちこぼれ、教師になる」～育もう子どもたちの肯定感～

宮本氏は、ご自身の経験に基づくお話、そしてユーモアも交えながらのお話、あっという間に時間が過ぎました。以下、講演の内容を記します。

【共感的理解】

子どもに対して、まず共感的理解という立ち位置に立ってほしい。「楽しいは楽しい」「悲しいは悲しい」と、子供から受け取ったボールはいったん受け取ってから返してほしい。大事なことは1点目、コミュニケーションの基本は肯定から始めること。二つ目は、大人の価値観でなく子どもの価値観を尊重する。三つ目は、あらゆる想像力を働かせて、どういう気持ちになっているか察するというか、気持ちに寄り添ってほしい。いじめられていることを話してくれた時は、「よく話してくれた。勇気がいただろう。お前の味方だぞ」と、これで勇気がもらえる。



【適した学習方法】

「勉強しなさい」と言われてうれしい子、燃える子は一人もいない。逆に「やるな」はやりたくなる。子どもを導きたいときに、指示や命令は反発する。子どもであっても自分の行動は選択したい。したがって選択と提案がいい。自分で選んだほうがやる気が出る。いろいろなタイプの子がいるがダメな子は一人もいない。いるとすれば時間が必要だけ。適した方法で定量こなせば絶対に伸びる。伸び悩んでいるときどんな方法で取り組んでいるのかという目線を持って、アドバイス出来たらよい。適した方法の探し方には、認知特性(視覚、聴覚、言語)にヒントがある。その子にとって言語優位なのか、視覚優位なのか、見極めたい。

【当たり前の反対は?】

段階的に考えると、「当たり前じゃない」→「当たり前じゃない」ということは特別→不幸ではなく幸せでいられることが特別→特別なことはありにくい→漢字で書く→有り難い→もう一つの読み方→ありがたい→「い」を「う」に代えると有り難う→ありがとうとなる。誰かが自分のために何かをしてくれるのに当たり前という理由はない。必ず感謝することが含まれている。感謝の種をまく。「毎日最低5回はありがとう」という言葉を使ってください。ありがとうは人を傷つけません。親から言われてうれしい言葉は「ありがとう」です。子どもの存在価値を高めます。

【評価欲求を満たした評価方法】

人の欲求には段階がある。それぞれ満たされていく流れは生理的欲求→安全の欲求→所属と愛の欲求→評価欲求→自己実現の欲求である。自己実現に向けて「夢を持って希望を持って」と子どもに言うのであれば、その前段階の欲求が満たされているか目線を持たなければいけない。評価欲求に目を向けます。自己評価は他者評価と表裏一体である。大人から○をいっぱいもらった子は自分にもたくさん○を出す。自己肯定感が低いと、ルール・思いやり・意欲が安定しない。自己肯定感を育むためには小さな成功体験の積み重ねです。評価欲求を満たしてあげる。人を評価する方法には3種類ある。Doing 行動・Having 何を持っているのか・Being 存在である。Doing と Having に○を出してあげる。事実の一つだが見方は二つある。10問テストで1問しか合っていない時は、次2個頑張ろう。全問不正解の時は、見せてくれてありがとう。難しいときはありがとうを使いましょう。子どもの自尊心が満たされるのは一生懸命に頑張ったことを認められた時でなく、ほめてもらった時ではなく、失敗しても抱きしめてもらった時です。愛してもらえる存在です。子どもの目がキラキラ輝いてもらうには、大人がすべてのことを楽しんで、その笑顔を見て子どもたちは笑顔になります。